
僕、発進

徳山 ノガタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕、発進

【Nコード】

N4209D

【作者名】

徳山 ノガタ

【あらすじ】

「多重人格」？うーん、ちょっと違う。ちょっと不思議な体質の少年の独白。

『多重人格』って、知ってる？ たじゅーじんかく。

一人の人間の心の中にいくつもの人格があつて、それらが代わる代わる表に出てくる現象。

この『多重人格』の特徴は、一つの人格が表に出ている時、他の人格は心の奥に引っ込んでいて出てこれないっていうこと。

同時に二つの人格が表に出ることはない。肉体を動かせる権限を持っているのは表に出ている人格だけ。

つまり、僕は厳密な『多重人格』じゃない。だって、僕は僕のほかにも、『右手』『左手』『右足』『左足』『目』『鼻』……ああ、全部言おうとしたらキリがないや。

「言い出す前に気付けたの」

……聞いた？ 今しゃべったのが『右手』さ。

「これこれ、ご主人」

「私たちの事もちゃんと右と左に分けて言ってくださいな」

ああ、ゴメン、ゴメン。『右目』に『左目』。

わかった？ 僕は体中のあちこちに『人格』があるんだ。

『右手』には『右手』の人格。

『右目と左目』には『右目と左目』の人格がある。

当然『左手』や『右足』『左足』にも、ね。

コイツらは心の奥に引っ込んだりなんかしない。いつも、いつでも、僕が起きている限りコイツらも起きている。

ああ、ほら、『左手』の爪が伸びているよ。『右手』、切つてあげて。

『「ハイハイ……」』

『右手』はちょっと口が悪い。僕が右利きだから、自分が一番偉いんだと思っているんだ。

「なにか言ったかい？ご主人」

んーん、何も。

あ、そうだ。爪切りは隣の部屋の机の上だった。

『右足』『左足』ちょっと立ち上がって隣の部屋に行っておくれ。

「了解ッス」

「同じくッス」

今、僕は『足』にしか命令しなかったけど、立ち上がって歩くの

って結構大変なんだ。

上体のバランスをしっかりと保って、背筋を伸ばして、『右目』と『左目』にしっかりと開いてもらわなくちゃいけないんだもの。

誰かが間違えたら転ぶか、何かにぶつかってしまふ。

ほら、1、2。1、2。到着。

『右目』と『左目』から送られた情報を使って机の上の爪切りを捕捉。『右手』に取ってもらって、『右足』『左足』着席！

どうして、僕の手足や目が人格を持って話はじめたのかはわからない。気がついていたらそうなっていたんだ。……そうそう、『左手』はティッシュを一枚とって下に敷いて。その上で爪切り開始。

パチン、パチンという音を『右耳』と『左耳』が捉える。『耳』は二人ともとても律儀な性格なんだ。『目』はまぶたを閉じれば休めるけど、『耳』それに『鼻』は休めない。ふたがないからね。『耳たぶ』ならあるけど、たぶとふたは大違いだ。

「痛いっ！ ちょっと『右手』！ 深爪にしないでよ！」

「うるせーな」

ああ、また『右手』と『左手』がケンカしている。ちなみに、なぜか『左手』は女の子だ。

「ヘタクソ！」

「なんだとお！？ 左の方が不器用じゃねーか！」

「こらこら、もう『両手』 ったらケンカしないでよ。手を取り合つて、仲良く……ね。」

「……あれ？ どうしたの、『右耳』。」

「ワン、ワワン、ワン！ ……キヤーッ！」

犬の鳴き声と女の人の声。 ああ、また、野良犬のブチが人を襲っているんだな。あいつは人間が怖がっていると調子にのっているくせに、こっちが強気になるとすぐに逃げ出してしまつ。よし、助けに行こう。

こんなときは、いちいち体の各部に命令なんて出しているヒマはない。こうするんだ。

全たーい、起立！ 発進！

これで僕は立ち上がり、『目』と『耳』の情報に基づき現場に駆け付けることが出来る。もちろん、各部にそれぞれ命令を出した時と比べて大雑把だから、たまに転んだりぶつかったり、場所を間違えたりする。いわゆる、慌てる、とか急いでいる、状態だ。

今回は転ばずに辿り着いた。

『右足』、けつとばすフリをしてブチを追い払って。

「了解ッス」

「同じくツス」

ちょ、ちよつと『左足』！ 君まで動いちゃダメだよ！ ……危ない、危ない。

どうにかブチを追い払って、うちに戻る。

さて、そろそろお昼寝の時間だ。『眠る』という行動は僕の命令がなくても勝手にしてくれる。……やっと静かになった。

それにしても、『目』の二人、もう少し若々しくなれないかなあ。これじゃ老眼だよ。まったく。

あ、そうそう。僕のこと、誰だと思う？

……脳ミソだろうって？ ちがう、ちがう。僕は『脳ミソ』の代わりにしゃべっていただけさ。

そう、『口』だよ。僕は。じゃないとこうして君と話ができないじゃないか。

『脳ミソ』はもう夢の中さ。

え？『脳ミソ』が眠っているのにどうして僕はまだしゃべっていられるのかって？

それはね……

「この子ったら、また寝言いつてる」

律儀な『耳』が、そんな声を拾ったような気がした……

（後書き）

正確には、脳が完全に眠っていると寝言も言えないのですが……あんまり細かく考えないでください（汗）あ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4209d/>

僕、発進

2010年10月28日08時38分発行